

中城村

# 戦前の集落

Series 1 **泊** Tomari



## 【もくじ】

I	泊のあらまし	P2
II	名所・旧跡	P3~4
III	旧家・門中	P5
IV	祭祀と信仰	P6~7
V	戦前の集落と地名	P8~17
資料1	泊の地名(位置図)	P18
資料2	拝所の位置図	P19



## ⑪ウヨグスクヌカー



大クワディーサーの東側にある石灰岩群の一角をウヨグスクと呼び、ウユー(御世、古い先祖)の墓と考えられている。その岩の根元に、自然石に囲まれた井戸跡がある。戦後、復元されたもので水はない。

## ⑫アップガー



イーヌモー近くの国道沿いにある。大正期か昭和初期頃、泊の地相を風水師に判定させた際、フンシー(風水)を改善するにはアップガーを掘る必要があるといわれ、ムラで協議した結果、松根と新屋棚原の間を掘ることになった。しかし、せっかく掘ったが水は出なかった。それに代わって掘られたのが大クワディーサー近くにあるシチャヌカーだといふ。

水の出なかったこのアップガーは、井戸を埋めてはいけないという習わしにより、そのまま残されることになった。この井戸もその後の国道建設にともない現在地に移動した。現在もムラ行事の際には拝まれている。

## 3 ガマ(洞穴)

## ①ウドウイガマ(踊りガマ)



集落の北方にある洞穴。戦前このガマの近くに岩があり、ムラアシビが始まる三日前から歌や踊り、三線の練習はそこで集中して行った。その場所の近くにあるガマということで、この名称がつけられたといふ。

戦時中、多くの泊住民がこのガマを避難壕として利用していた。沖縄戦中に避難している際、米軍に見つかり、取り囲まれたが住民の中にハワイ移民を経験した人がいて、住民を説得し、米軍との交渉にあたった。幸いにも住民は捕虜収容所に送られ、多くの命が救われた。現在では崩れてしまった箇所もあり、昔の面影をとどめていない。

また、ウドウイガマの手前にも別のガマがあり、そこも避難壕として利用された。

## 4 墓

## ①金満お墓



中城グスクは、護佐丸以前の先中城按司が14世紀中頃から築き始め、その後、一族の数世代を経て15世紀前半までには大部分を完成させたと考えられている。

その先中城按司初代(ウサチナカグスク按司)のものと言われる掘込み形式の墓がデーグスク(台グスク)の護佐丸の墓の後方にある。この墓は、先中城按司直系の子孫といわれる泊大屋によって拝まれている。

〈資料1〉参照

## ②かねまんお墓



中城グスクの郭の東側崖下にもかねまんお墓と伝えられる墓があり、傍らに「かねまん之碑」と記された墓碑が立っている。これも先中城按司系統のものといふ。「かねまん」という名称は、墓に散在していた遺骨を泊大屋が取りまとめ、葬った際に多くの古銭が出てきたことに由来するといわれている。この墓も、泊大屋によって拝まれている。

〈資料1〉参照

## ③ユシ按司の墓



中城グスクの東方にある。先中城按司系統の按司墓と伝えられているが、何代目の按司で、いつ頃造られた墓なのか詳細は不明となっている。

〈資料1〉参照

## 1 大屋(泊大屋)



泊大屋の神屋

先中城按司の子孫と伝えられており、姓は小橋川。先中城按司初代(ウサチ中城按司)は、当初台グスクに居住していたが、14世紀中ごろに中城グスクの一部を築き始め、その後、一族が数世代かけて南の郭、西の郭、一の郭、二の郭を築城し、居城していたと伝えられている。ところが先中城按司四代目の時に中山王から立ち退きを命じられ、糸満の真栄里に移り、そこで真栄里グスク(先中城グスク)を築いたと伝えられている。その後、子孫にあたる泊大屋子が泊ムラに戻って住むようになった。それが現在の泊大屋だといふ。今でも県内各地の門中関係者の参拝が絶えない。

泊大屋系統の門中に東り大屋、田場、棚原、松根、東り門、饒波などがあり、ムラ行事には泊大屋を中心に一緒に参加した。また、神行事として糸満真栄里方面へ参拝に行くときも、これらの門中が揃って出向いた。その際は御馳走や酒を担ぎ、三線を引きながら歩いて行ったといふ。一行が当間マーチャー(現当間公民館)の辺りまで来ると、当間ムラの人たちが「ナナマジラーガ チューンドー」と言いながら通せんぼをして、何か芸をしないと通さなかったといふエピソードも伝えられている。

泊大屋を中心にした門中は、島尻、大里、真栄里などいくつかの地を経て泊ムラに落ち着いたといふことから、「ナナマジラー」と呼ばれるようになったといふ。

## 2 安里(泊安里、根屋)



泊安里の屋敷

泊ムラの創始家とされ、姓は比嘉。村落祭祀の中心的な役割を担っており、ムラの根人と根神は代々この家系が受け継いだ。義本王(在位1249~59年)の系統と伝えられている。戦前の泊安里の神屋は、現在よりも広かったため、ムラの総会をはじめ学事奨励会や運動会の選手奨励会も行われていた。

## 3 東り門



東り門の神屋

泊ムラの門中の一つ。フツチャヌメーの近くに石灰岩の大岩があり、そこはアガリジョーウタキ(東り門御嶽)とよばれ、香炉が置かれている。かつて泊村は中城グスク周辺にあり、いつの時代かは不明だが、現在の場所へ移動したと伝えられている。その時、東り門門中の先祖が最初に屋敷を構えたのが、このウタキだといふ。

## 4 前又安里(トバサー門中)

泊ムラの門中の一つで、古くからある家で、系統の門中には東り(姓は島袋)、前外門(姓は比嘉)などがある。

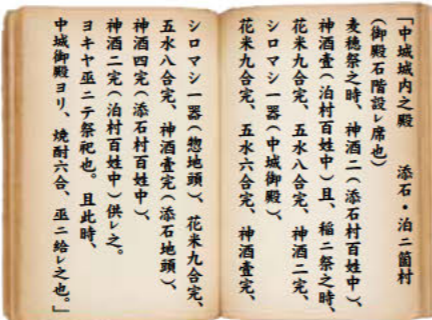
# 祭祀と信仰

## 1 『琉球国由来記』に見る泊ムラの祭祀

1713年に首里王府によって編集された『琉球国由来記』には、琉球各地の拝所や年中祭祀が詳細に記載されている。そのうち泊ムラに関わる拝所として「中城城内之殿」が紹介され、要約すると次のように記述されている。

中城城内之殿については麦穂祭(二月ウマチー)の際に中城御殿をはじめ添石や泊の村人が神酒を供え、稲二祭(稲穂祭・五月ウマチー)と稲大祭・六月ウマチー)には中城御殿や中城総地頭のほか添石地頭、それに添石や泊の村人も神酒や花米などを供えた。祭祀はいずれもヨキヤ巫が執り行った。

『琉球国由来記』より▶



## 2 泊ムラの神人

### ①添石ノロ(ヨキヤノロ)

琉球王国時代、泊村の祭祀を管轄したのは添石ノロであった。

古くはヨキヤノロ(与喜屋ノロ)と称され、護佐丸を元祖とする毛氏とも関わりがあると伝えられている。昔、読谷山という役人が奄美に派遣された際、与喜屋村の女性との間に二人の子をもうけた。時がたち豊見城親方が奄美に立ち寄った時に、その子ども達を沖繩に連れて帰り、育てることにした。その子女が成長し、後に与喜屋ノロになったという。添石ノロは、泊のほか添石・伊舎堂・新垣をはじめ中城グスク内の拝所の祭祀を管轄した。

### ②根人

根人とはムラの創始家とされる家系(根屋)の当主のことで、かつてはノロと共に祭祀を司り、ノロの補佐役として重要な役割を担った。泊ムラでは泊安里が代々受け継いできたとされる。

しかし、戦後一時期まで行われていた祭祀の様子を知る人の話によると、泊の根人は伊舎堂の前仲順(伊舎堂安里系統)の人が務めるようになっており、年中行事がある時は伊舎堂から泊まで来て祭祀を行っていたという。

これに疑問を持った泊出身のある人が、実際に戦後も根人をしてきた前仲順六代目(明治33年生まれ)の人に話を聞くと、「自分より五代前(初代)の人が、添石ノロから、ニーンチュジー(土地)を与えるから、泊ムラの根人をやらないかと言われたので、それを引き受け、代々、泊の根人をやることになった」と話していたという。実際にそのことを裏付けるように、伊舎堂の前仲順家が泊の古島原にニーンチュジーを所有している。

また、根人に関するエピソードとして、行事が終わると、フッチャヌメー小でムラの人たちが「トゥンケーレー ニーンチュ」と声をかけ、手を振ってノロと根人を見送ったという。ところがある時、ムラ人の一人が「トゥンケーレー メーチュンジュン」と、冗談交りに面白く言ったため、それ以降はそのようなかけ声になったという。

## 3 ムラの祭祀

1879(明治12)年の琉球処分による琉球王国の解体にともない、ノロなどの神女組織も公的地位を失うことになった。しかし、その組織が途絶えた後も大正期頃までは、ムラの祭祀は添石ノロと泊ムラの根人を中心に行われていた。また祭祀を行う時は、各門中の神人で祭祀を司るクディと呼ばれる人が、門中の香炉などを準備してノロを迎えた。

戦後の一時期まで、農作物の豊作やムラ人の安全、無病息災を神々に祈願する祭祀は、根人を中心に行われてきた。しかし、農業の形態や作物が変化し、生活習慣や価値観が多様化したこともあり、伝統的な祭祀は時代とともに変容し、神人自体も消滅してしまった。そんな中でいつしか消えていった祭祀もあるが、集落(自治会)の安泰と区民の健康を祈願し、祈りを捧げる行事は簡略化しながらも、今なお受け継がれている。

### ①ハチウビー

旧暦1月2日に行われる行事。水と塩に対して感謝する日とされ、集落内の井戸や拝所を拝む。現在は次の順路で拝んでいる。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊大屋 → 中城グスクへのウトゥーシ(遍拝) → 泊安里 → 東リ門 → 最初に掘ったウブガー → ウブグシクガー → イーヌカー → ウステークガー → アガリガー → ウヨグスクヌカー → 東リ門御嶽 → シチャヌカー

### ②ウマチー

旧暦2月15日(ニングウチウマチー)と5月15日(グングウチウマチー)に行われる行事。2月ウマチーは麦、5月ウマチーは米でそれぞれウンサク(御神酒)を作り、供えた。また、戦時中は配給制になったため、芋でウンサクを作った。

### ③クシユックイー

旧暦2月2日に行われる行事。稲や豆などの作物の植付けが一段落する頃で、一休み(腰休め、腰憩い)の意味がある。今でいう慰労会のようなものである。戦前はクシユックイーグミがあり、ヤーフチクミと同じクミ(組)で、それぞれのクミでご馳走を準備した。また各クミの代表が供物を出し合い、ムラ火の神に供えた。子供たちにとっては、ジュシーや豚肉などの御馳走を食べられるため、とても楽しみな行事であった。

### ④アブシバレー

旧暦4月13~15日に行われる行事。虫払いをして豊作を祈願する。昔は、スガチミチの現公民館敷地の辺りから海に虫を流していたという。その期間は畑仕事や針仕事などが禁止された。

また3月(旧暦)末頃からは「山止め」といって山に入る事が禁じられ、木を切ることも出来なかった。そのため、禁じられる前にまだ青い木を取ってきて何本かに束ね、家の天井に保存した。山止めの頃には乾燥した薪になっており、その期間はそれを利用したという。

各家庭では赤飯や牛、豚などのお汁を作り供えた。またムラでは集落内の井戸を拝み、それから泊大屋に集まってご馳走を食べ、ムラ芝居や伝統芸能の稲すり節、そして旗頭などが盛大に行われた。現在は次の順路で拝んでいる。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊安里 → 泊大屋 → 棚原 → 東リ門

### ⑤ウハチ

旧暦6月23日に稲の収穫を祝い、お初物を神に捧げる行事。戦前は泊大屋で行われ、白装束を着た神人が祭事を行った。大人も子供も大人数で旗頭を持ち、太鼓やドラを打ち鳴らして集落内をまわった。供え物としては、ニンジンの煮物や三枚肉、ウチャナクなど。また、各家庭からごはん茶碗一杯ずつの新米を持ち寄った。ウンサクは泊大屋で準備した。現在も行われており、次の順路で拝んでいる。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊大屋 → タマウノーシガー → 泊安里 → 棚原 → 東リ門

### ⑥十七日



2011年の「十七日」

旧暦7月17日に行われる行事。旗頭を持ち、太鼓やドラを打ち鳴らしながら集落内を道ジュネーし、集落の厄払いと住民の健康、五穀豊穰を願った。また、住民総出のムラ芝居は三日間行われ、村内外から多くの見物人も来るほど、盛大に行われた。現在は次の順路で拝んでいる。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊大屋 → 泊安里 → ウステークガー → イーヌカー → 最初に掘ったウブガー → アガリガー → ウヨグスクヌカー → 東リ門御嶽 → シチャヌカー

### ⑦ムーチー

旧暦12月7日の行事。現在の公民館の近くに「シチャヌウガングワー」という広場があり、そこでシンメーナービに牛汁を炊いて、ムラ人に振る舞った。牛汁は汁と肉を別々に分け、ウシヌシシヌシルグワー(肉汁)は一口か二口分を各家庭から持ってきたお椀に入れ、そして肉は一〜二切れをユーナの葉に包んで配られた。当時は食べ物も豊富ではなく、わずかの量しか配られなかったが、子ども達にとっては牛汁が食べられる楽しみな行事であり、大勢集まった。現在は次の順路で祈願が行われている。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊大屋 → 泊安里 → 棚原 → 東リ門

### ⑧ウガンプトゥチ(御願解き)

旧暦12月24日に行われる行事。一般にはこの日に火の神が昇天するとされ、そのため1年間で起こった良いことを火の神に報告する日と考えられている。現在は次の順路で拝んでいる。

ムラ火の神 → 電宮 → 泊大屋 → 泊安里 → ウステークガー → イーヌカー → 最初に掘ったウブガー → アガリガー → ウヨグスクヌカー → 東リ門御嶽 → シチャヌカー

### ⑨ワラバーツナ(子供綱引き)

昭和初期頃まで行われていた子供の綱引き行事。ワラバーツナの由来について、もともとは先中城按司が移り住んでいた糸満真栄里の綱引きを、泊ムラにも持ち込んで行っていたが、ある時期にムラの経費節減のため規模を小さくし、簡素化してワラバーツナに変えたのではないかと推測されている。



2 昭和 19(1944)年当時の泊



沖縄県公文書館所蔵「米軍撮影空中写真」  
(米軍が昭和19年9月29日に撮影)

### 3 地名

〈資料1〉(18ページ)参照

#### ①フッチャヌメー



国道329号の泊交差点近くの大クワディーサーがある一帯の呼称で、そこにはシチャヌカー(ウプガー)と呼ばれる井戸がある。その井戸は、人が掘った(フッチャ)という意味にちなんで、そういう名称が付けられたといわれる。

戦前、フッチャヌメーの後ろに倶楽部(公民館)があったが、言い伝えによると、この一帯は倶楽部が出来る以前からムラの集会場になっており、いろいろな行事も行われていた。それを知らせる際は、太鼓を叩きながら集落内をまわり、「フッチャヌメーカイ集マイソーリヨ」呼びかけたという。

#### ②フッチャヌメー小



集落の南西側、かつての県道沿いにあった広場。泊には、昭和初期頃までワラパーヅナ(子供の綱引き行事)があり、フッチャヌメー(東)とフッチャヌメー小(西)に分かれて綱作りが行われた。

当時はここにも大きなクワディーサーがあり、ウマチーの際はムラ人が集まり、ウンサク(神酒)を飲んだ。また祭祀が終わるとノロとニーンチュ(根人)を見送った場所でもある。

#### ③イースモー(上の毛)



集落の中央部、国道329号より北側にある。ムラで何か集まりや行事があると、そこで太鼓を叩いて区民に知らせた。また、毎朝五時になると、吉名幸の人がその太鼓で時刻も知らせたという。

かつてのイースモーは、現在のような平らな土地ではなく、盛り上がっていて、大きな松やクワディーサーなどの木々が生い茂り森のようになっていた。向かいにはメンターガーラを利用した水場があり、洗濯をしたり、芋を洗ったりするなどムラの人たちには欠かせない生活の場所になっていた。また、子供たちにとっては恰好の遊び場でもあった。

#### ④チバグスク



現在、国道329号沿いにある給油所の一帯で、戦前は大きな岩があり付近をウンジャガーラが流れていた。周辺はカヤが茂っていて、その中にちょっとした広場があった。そこには祠があり、拝所になっていた。かつては神聖な場所だったと推測される。

また、ここは「トーシンイシ(唐船石)」あるいは「ヒータイシ(火焚石)」ともいわれ、交易時代には火を焚き、航行する船に位置などを知らせる灯台の役割を果たしていたのではないかと伝えられている。

唐船石があった場所(給油所裏)▶



#### ⑤ウビジャーバル



チバグスクの北方の斜面地帯。明治初期頃、この一帯が地滑りをおこし、ウンジャガーラが氾濫してチバグスクを巻き込み、下方の田んぼを全て埋めてしまったと伝えられている。そのため現在の国道から吉の浦線にかけての一帯は畑地や宅地として利用されるようになったという。

#### ⑥クミノカヤカイモー(組の茅刈り毛)

集落後方・宇富原にある原野。かつてはほとんどの家が茅葺で、新築や屋根の葺き替えに茅が利用された。ここは、その茅が生い茂り、カヤモー(茅毛)と呼ばれていた。茅を刈り取る場所は組ごとにそれぞれ割り当てられており、この組のことを「ヤーフチグミ(屋葺組)」と称している。刈り取る際は、組に代金を支払った。

大正期か昭和初期頃、泊集落に風水師が入り地相を判定させたところ、「傾斜地になっているカヤモーはフンシー(風水)が悪い」ということで、平らに均したという。後に、平らになったこの広場で村芝居や踊りなどが行われるようになり、「ウドゥイモー(踊り毛)」とも呼ばれるようになった。

#### ⑦ウスデークモー(白太鼓毛)



集落の東寄りにあった広場。ここは、沖縄戦が始まる直前まで屋号・前外門小という家があったが、かつてはアシビナー(遊び庭)だったと伝えられている。近くにはウスデークガーもある。ただし、戦前の様子を知っている年配の方々にも、泊でウスデークが行われていたという記憶はないという。仮にムラ行事として行われていたにしても、明治以前のことと考えられる。

#### ⑧ウマウクイモー(馬送り毛)



泊から久場へ行く農道の途中に大きな岩があり、その周辺を「ウマウクイモー」と呼んでいる。そこは馬や豚などの家畜が死んだ時に葬った場所といわれる。また、海岸から身元不明の死体があがった時にも、ここに埋葬した。

昔は各ムラの域内で身元不明の死体が見つかる、それぞれのムラの責任で埋葬しなければならなかった。そのため、このような場所は各地にあったようで、ムラ(字)有地の中でも利用価値の低い土地が選ばれた。その下方もムラ有地となっており、茅が生い茂っていた。

#### ⑨ウテージバル



中城グスク南側の県道146号線周辺で、左の写真では鉄塔付近の窪んだ一帯。ウテージとは「落ちた土地」という意味で、この一帯は昔から地滑り地帯であったため、そう呼ばれるようになったといわれる。

#### ⑩アンガー(スムヌカーバル)

ウテージバルの一部になっており、ティラ御嶽から県道146号線の南側辺り。

#### ⑪ナガサチモー

デーグスク(台グスク)にある護佐丸の墓の周辺一帯。墓の東側にはナガサチウカー(ユーナヌ下ヌウカー)と呼ばれる井戸があり、泊の人たちによって拝まれている。

デーグスクは標高170mの高い位置にあり先端が切り立って岬ようになって見えるため、「長い崎」「サキモー」からそのように呼ばれるようになったという。

#### ⑫ユンヌバル(与武野原)

泊の東側、久場との境にある小字(原名)で、多くの無縁墓がある。その由来については、護佐丸が中城グスクを増築する際、与論島から多くの石ゼーク(石工)を連れてきたといわれ、死後その一帯に葬った。それが無縁墓として残っているという。そのことから「ユンヌ(与論)バル」という地名がついたとされる。

#### ⑬ウヨーバル

昔は、ユンヌバル一帯を「ウヨーバル」とも呼んでおり、いたるところに墓がある。古い祖先のことを「ウユー」ということからその名が付いたとされる。その中には泊の祖先と関係があると言われる墓があり、かつては安里家(根屋)が管理していた。

⑭ヤットウクルーバル



久場へ通じる農道の途中を指す地名。かつて、八つの田んぼがあったことから、そういう呼び名が付けられたと言われる。周辺にはデーグスクから流れてくるウヨガーラがあり、それを利用して水田が拓かれていたと考えられる。現在、写真の右側は畑として利用されている。

⑮ウシヤチャーバル



与武野原の久場へ向かう農道の途中、右側にある地名。与武野原にはデーグスクから流れてくるウヨガーラ（川）があり、ウシヤチャーバル付近には、その川の水が流れ落ちる落ち口があった。現在もその名残が見られる。

かつては、祭祀に使われる牛を屠殺する場所だったので、その名が付けられたのではと考えられている。

⑯カンセンアタイ



ウシヤチャーバルの近くにある地名。交易時代、交易船に供出する野菜を作るアタイ（畑）だったと伝えられており、そのためこのような地名がつけられたという。

近くを流れるウヨガーラを利用して畑が行われていたと考えられている。終戦後も、畑地として利用されていたが、現在はその面影はなく、木々が茂っている。

4 水利

1) 河川

①ウンジャガーラ



泊の集落の西側、伊舎堂との境界あたりを流れる川。源流は、中城城跡の一の郭の東側下方にあるティラ御嶽（かねまんお墓）周辺のティラヒージャーガー。チバグスクには、そのカーラをまたぐようにして唐船石と呼ばれる大きな岩があった。

また、そこには岩を壺状に丸く削られたような直径 2.5mほどの湧水口があり、常に水を湛えていた。普通の川ではあるが、湧水も一緒になっていたため、「ウビヒージャー」と呼ばれていた。写真の中央あたりが、チバグスクから流れてくるウンジャガーラ。

②ウドゥンガーラとメーターガーラ



集落内の中央部やや西よりを流れる川。ウドゥイガマあたりから下サーターヤー近くを経てスガチミチ方面の田畑に注ぐ。同じ川筋だが、川上の方はウドゥンガーラ、川下の方はメーターガーラと称している。

③ウヨガーラ

デーグスク（台グスク）あたりを源流とし、ウシヤチャーバルとカンセンアタイを流れている川。この川を含め、泊を流れる三つのカーラ（川）は、そのまま海には流さずに、かつてはスガチミチ周辺一帯にあった田んぼへと注がれ、稲作に利用されていた。

2) クムイ（溜池）

①ウマアミシグムイ（現公民館の近く）



現公民館の側にあるクムイ（溜池）。サーターヤーで使っている馬に水浴びをさせるのに使われた。現在は石組みで囲い、整備されているが、元々は、土で囲まれており、さほど深くはなかった。

②ミーグムイ

ウマアミシグムイ（現公民館の近く）の東側にあった。明治期になって新しく掘られたので「ミー（新）グムイ」と呼ばれている。水田に利用するためメーターガーラの水だけでは足りず、新たに作られたという。

かつてフッチャヌメーにあるシチャヌカーは溢れるくらいの水が湧き出たが、このクムイに水脈が引かれることによって、水量が少なくなってしまったという。

③ウマアミシグムイ（中サーターヤーの近く）

集落西側の中サーターヤーの近くにも、馬に水浴びをさせるクムイがあった。

④最初のサーターヤー敷地向かいのクムイ



吉名幸（屋号）の敷地の角にあった。その家の向かいは畑になっているが、かつては最初のサーターヤーがあったと伝えられている。その頃このクムイが利用されていたと考えられている。

⑤その他のクムイ

泊には上記以外にも数か所のクムイがあった。フッチャヌメー小の向かいの西松根の辺り、それにミーグムイから現国道をはさんで北側のフッチャヌメー近くにもあった。また、集落北側のイーヌカーの近くにもあった。

集落内にあるクムイは、火災からムラを守る「ヒーゲイシ」（防火）の役割もあった。昔は、食事を作る時もカマドを利用していたため、火災が発生することが多かった。そのため集落の四隅に「ヒーゲイシグムイ」を作ったといわれている。

5 道

①旧県道



戦前の主要道路で、中城村内では久場から泊を経て吉の浦線を通り、奥間、和宇慶へと続く。かつては中頭郡の管理する「郡道」であったが、1909（明治 42）年頃、県費による道路改修が行われるようになり、県道として認定された。この道路改修工事の際、泊出身のイシゼーク（石細工）をしていた上東り松根、新名幸、吉里の人たちが工夫として働いたという。また、泊には碎石場があったため、碎石したものをザルー一杯でいくらかというかたちで、県に売っていたという話も伝わっている。

1914（大正 3）年に沖縄人車軌道が設立され、16年までには与那原一泡瀬間の全線に馬車軌道が敷設された。そのトロッコを利用して、西原製糖工場へサトウキビが搬入された。



## ②スガチミチ (潮垣道)



海岸線に沿って中城から西原へと続く道で、現在の潮垣線にあたる。古くはこの道の間際まで海だったという。

ペリー艦隊の訪問記もこのスガチミチについて「稲田は水際まで整然と続いていた。その水際には、潮が稲田に溢れるのを防ぐために堤防が築かれていた」と記している。かつて泊でもこのスガチミチから、現在工場地帯になっている海岸付近までは水田として利用されていた。

戦前はスガチミチにもトロッコ軌道が敷設されており、泊、伊舎堂、添石の人たちは県道側よりもスガチミチ周辺にほとんどのキビ畑があったため、このトロッコを利用した。

製糖工場に出荷するサトウキビはトロッコに乗せ、馬に引かせて運んだ。トロッコに積むキビの重さは3～4千斤(1斤=600グラム)で、トロッコは平らな台になっているためキビが落ちないように四隅に棒状のものが立ててあった。馬を操り走らせる役目の人(馱者)は、トゥルクムチャーと言われ、委託されて一往復いくらというかたちで請け負った。その中には泊出身者もいたという。

この軌道は当時の子どもたちから「トゥルク小」と呼ばれ、学校帰りに空っぽのトロッコが通ると、トゥルクムチャーのスキを狙って密かに乗り込み、見つかって怒られると降り、しばらくするとまた乗るといったいたずらを繰り返したというエピソードもある。

## ③久場に続く道



泊の集落から旧県道の北側を通り、久場に通じる道がある。フッチャヌメーや、かつての産業組合の前を通り、ウヨグスク、伊那具原を経て、久場の集落へと続いていた。

この道は旧県道が出来る以前から集落を結ぶ道として使われていたと考えられる。県道が出来た後も泊から久場へ行くとき、また久場の人たちが泊や伊舎堂、添石へ行くときはこの道を利用していた。

泊の年配の人の中には、久場の人たちが伊舎堂で豚を買い、それを棒に引っ下げて帰る姿などが鮮明に記憶に残っていると話す人もいます。

## ④ウフバルミチ

かつての中城村役場(中城グスク内)へと通じる道。集落の東側を通り、クミノカヤカイモ一の東端を上って行った。集落内もとの道は、これより西側を通っていたが、風水師の判定により、泊ムラの鼻筋にあたるためフンシー(風水)が悪いということになり、道を東側にずらして造られたのがウフバルミチだという。

## 6 屋取

戦前までデーグスクの近くの久場、泊、大城の区域に屋取※があり、池原(毛氏)・名幸(田氏)・小那覇・大山(毛氏)などの人々が住んでいた。そのうちの泊区域には「新屋名幸」、「平良名幸」、「牛名幸」、「長山名幸」の4軒の屋取があり、ムラの連絡事項がある時には、馬に乗って伝えに行っていた。また、子供たちの登校の際には、ヤージュヌメー(現屋宜公民館あたり)で屋取の子どもたちと待ち合わせをして一緒に集団登校したという。

※屋取:琉球王国時代の士族層のうち何らかの理由で首里から田舎に移り住み、定住した人の集落

デーグスク屋取▶



## 7 サーターヤー (製糖小屋)

沖縄の主要農産物といえばサトウキビで、中城村でもほとんどの農家が栽培していた。各集落には3～4カ所、多い所では6カ所ほどのサーターヤーがあり、毎年12月から4月にかけて黒糖づくりが盛んに行われていた。

泊には四つのサーターヤーがあり、そのうち西サーターヤー、中サーターヤー、ユジュースーターヤーの三つが、現在の国道付近に並んでいた。もう一つの下サーターヤーは現在の公民館近くにあり、メーヌターガラ沿いに釜があった。

昭和17年頃にユジュースーターヤーが下サーターヤーの隣に移動してきたため、二つのサーターヤーが隣接していた。

## 8 公共施設

## ①倶楽部 (村屋)

現在の公民館に相当する施設で、戦前はフッチャヌメーの近くにあった。倶楽部が出来る以前は、フッチャヌメーに集まり、天気が悪い時は泊安里の神屋が利用されたという。沖縄戦当時まであった建物は、大正期に伊舎堂の古民家を購入し、その材料をもとにして建てたものといわれる。木造瓦葺の建物だった。

## ②産業組合 (中城村農業会事務所)

産業組合とは、現在の農協のような組織で、1911(明治44)年に「無限責任中城村信用購買生産販売組合」として設立され、その後、いろいろな変遷をへて、1938(昭和13)年に「中城村農業会」と改称された。倶楽部があったフッチャヌメー近くにあり、木造瓦葺の平屋54坪の事務所と堆肥などを納めておく倉庫が併設されていたが、沖縄戦で半壊した。

## 9 マチャ (お店)

## ①一銭マチャ

フッチャヌメー小の近くで、鳥袋キクさんという人が営んでいたマチャがあり、駄菓子などを売っていた。またミシンを使って裁縫もしており、昭和11年頃フィリピンに移民した人の話では、出発する前に洋服を縫ってもらったという。

## ②雑貨屋

一銭マチャ(鳥袋キクさん)の向かいには、吉里の所有する瓦葺の建物があり、最初は歯医者に貸していたが、後に比嘉栄光さんという人が雑貨屋を営んでいた。戦争直前になると、吉里の親戚にあたる人が那覇から疎開して、そこに住むことになり、比嘉栄光さんは前倉根の屋敷を間借りして、饅頭や小麦、麦などを売っていた。

## ③たばこ屋

旧県道沿いの下サーターヤー向かいに小那覇小というたばこ屋があった。煙草を買いに行くのは大抵は子供で、親のお使いとして行かされた。「子供の頃によく煙草を買いに行かされた」という苦い経験を持つ人は多い。

## ④米屋

集落西側寄りの前ヌ比嘉では、米を仕入れて一合升で量り売りをしていた。

## ⑤薬屋

フッチャヌメー近くの新屋安里のアシャギでは村外の人が、薬屋を営んでいた。

## 10 瓦葺の家

戦前の住まいはほとんどが茅葺だったが、泊には瓦葺が9軒あった。そのほとんどが海外移民にかけ、そこで稼いで戻ってきた人たちだという。現金収入の乏しかった当時の人たちにとって、瓦葺はいわば「金持ち」の象徴だった。

## 11 馬車ムチャー

各集落には馬車を所有する人が数人おり、馬車ムチャーと呼ばれていた。製糖時期になると樽詰めにした黒糖を馬車に乗せ、那覇にある出荷場まで運ぶ役割も担っていた。

泊では新前棚原と前大嶺門、吉里が馬車を所有していた。そのうち前大嶺門はトロッコムチャー(馱者)もしており、トロッコにキビを積み、それを馬に引かせて西原製糖工場まで運んだ。一方、吉里は、イシゼークをしており岩山から切り出した石を、馬車に乗せて運んでいたという。

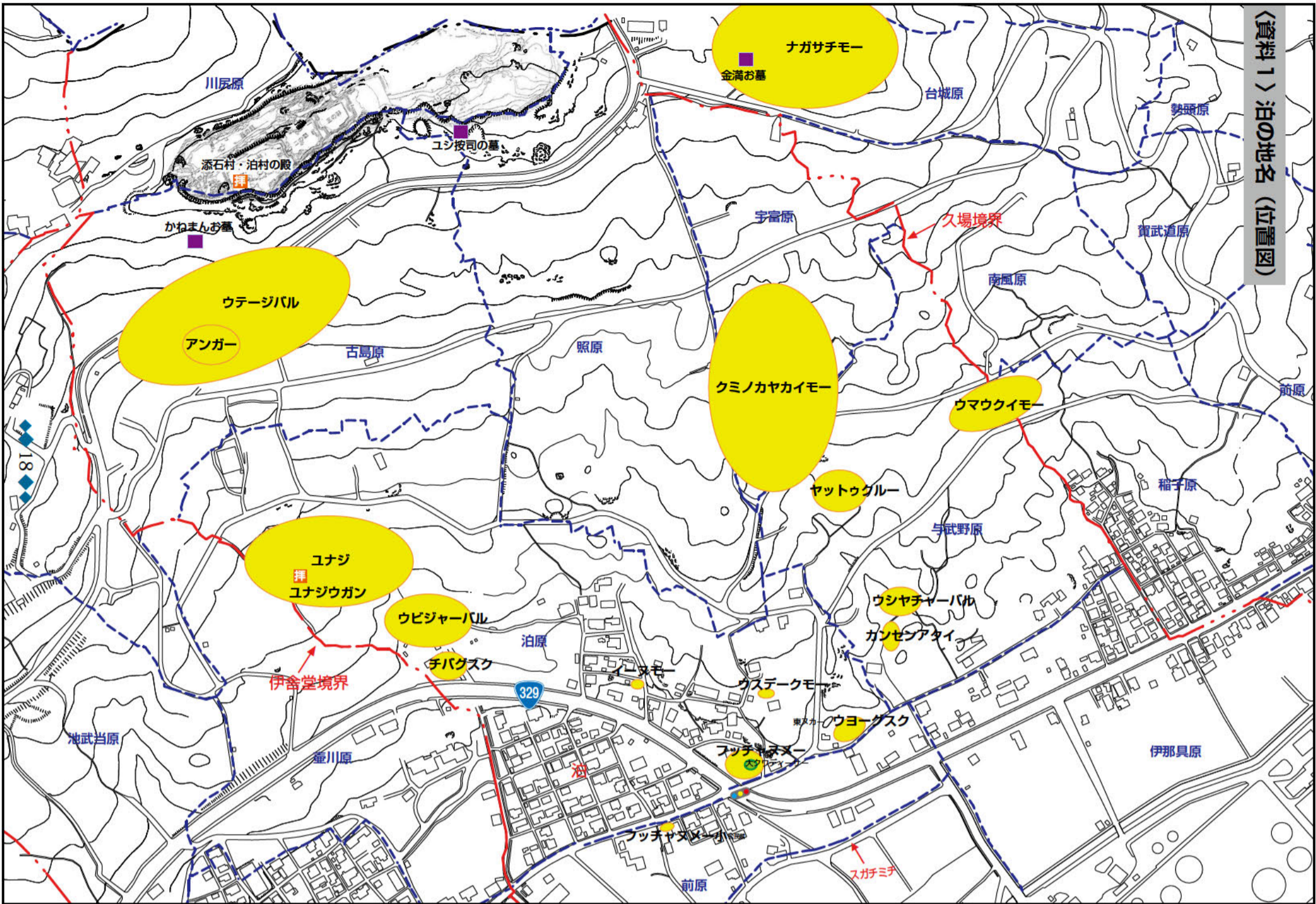
## 12 イシゼーク (石細工)

イシゼークは、岩山や海岸から石を切り出し、家の柱やお墓などの建築をする職人のことで、明治期の頃は、東大屋と前大屋、吉松根の人が墓などを作っていた。その後は吉里、上東り松根、新名幸、新屋名幸(デーグスク屋取)にイシゼークがいた。

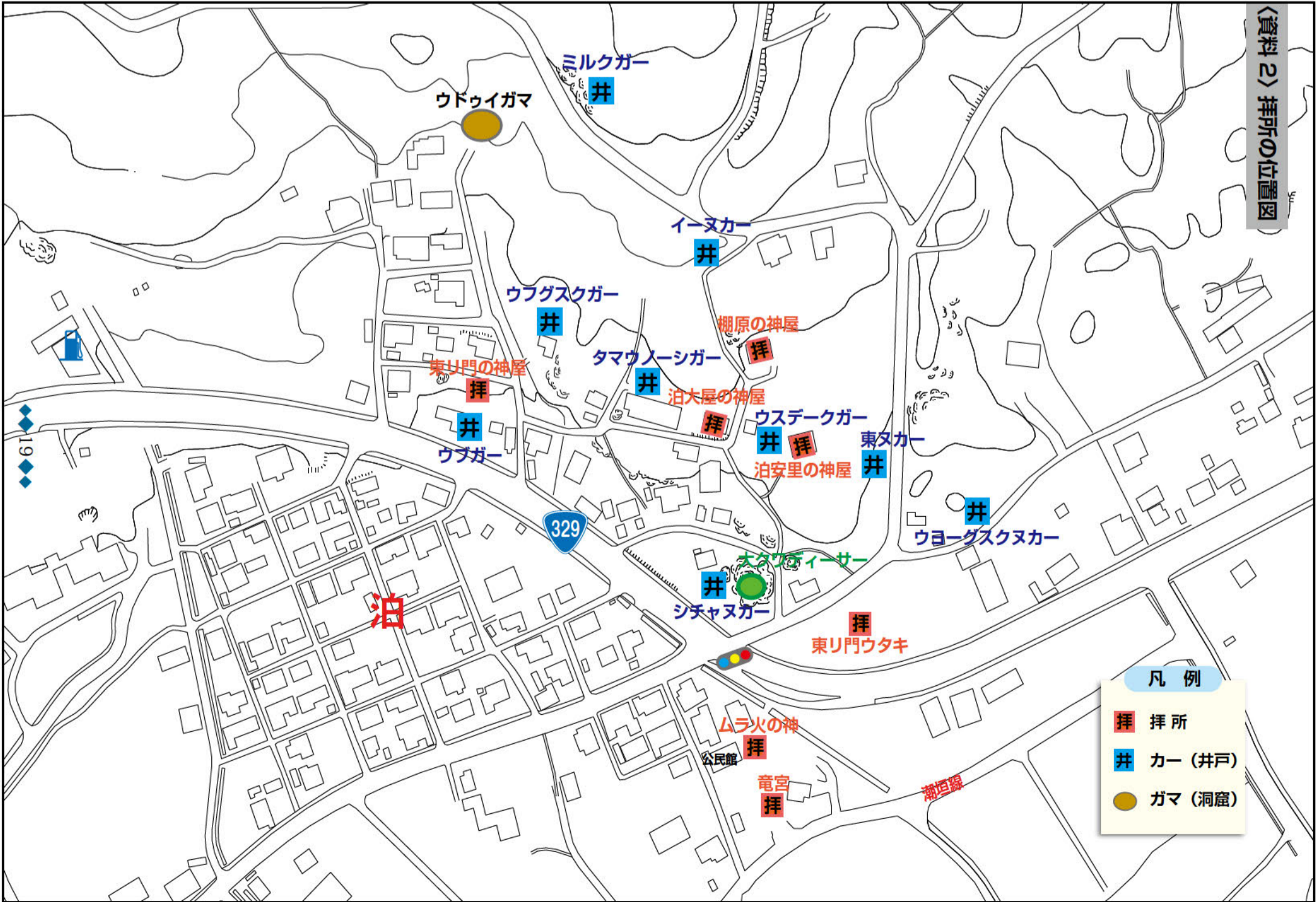
また、戦前の泊のイシゼークたちは中城グスクの石積の修復も行っていたという。それについては、大正7年生まれのある女性の人が自身の経験として次のように話している。「私が17.8歳の頃、城跡を修復する作業があり、新棚原、それに吉里のイシゼークをしている人の奥さんなど5名の女性も一緒に手伝いに行き、石カタミヤー(石担ぎ)をした」という。

泊は岩山が多く村内外のイシゼークたちも、よく石を切り出しにきたようで、北上原からも取りに来ていた。

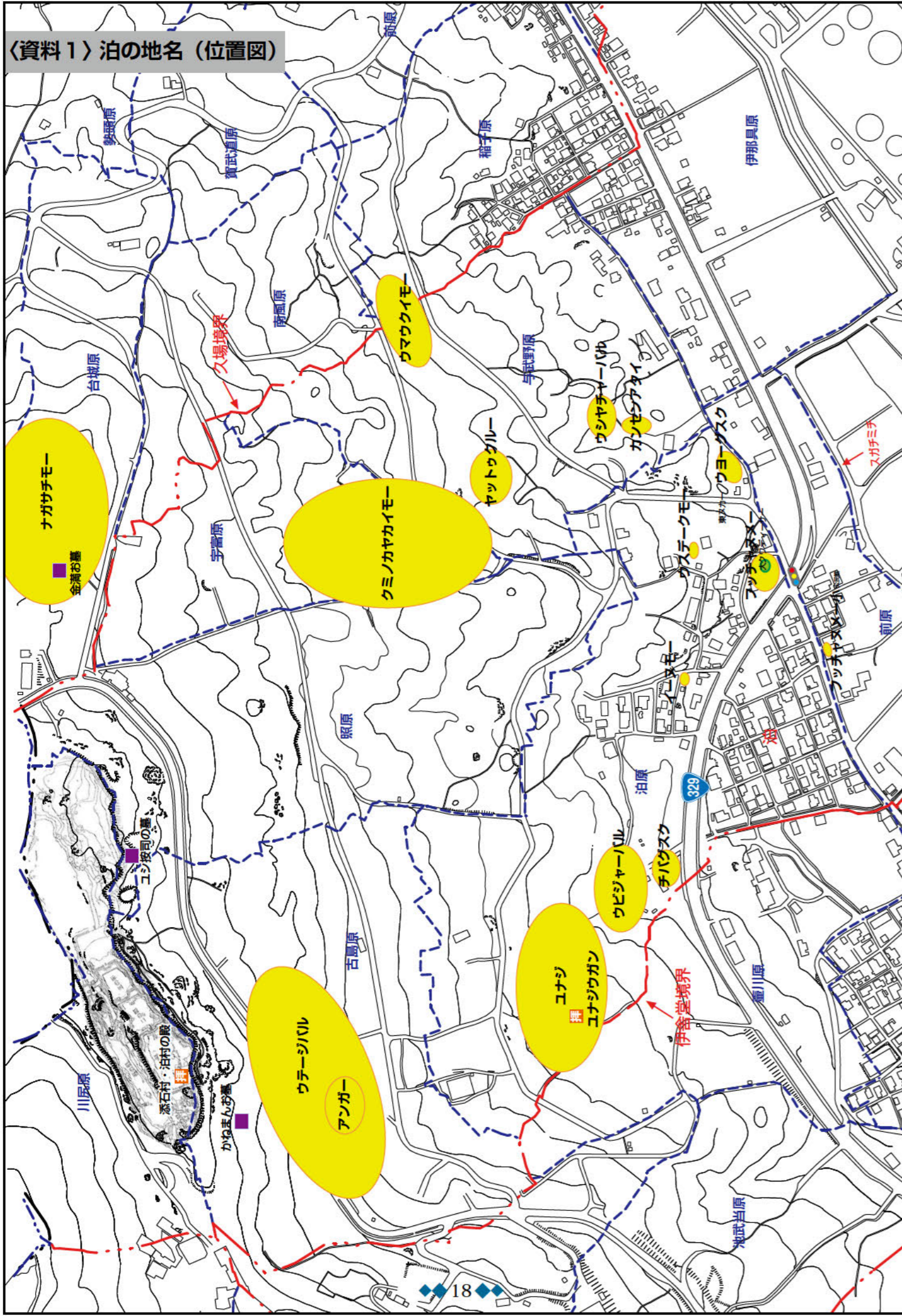
〈資料1〉泊の地名 (位置図)



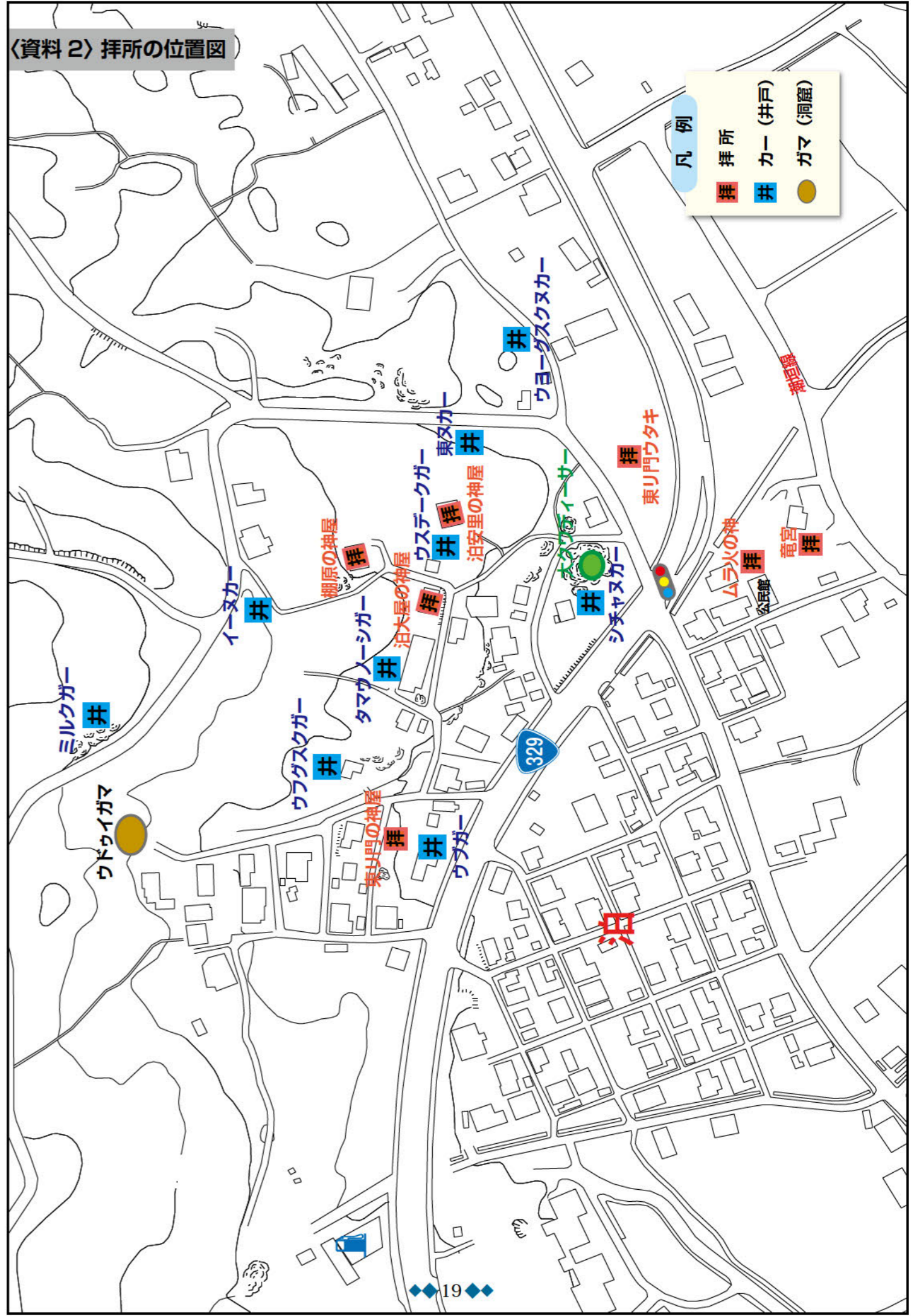
〈資料2〉拝所の位置図



〈資料1〉泊の地名（位置図）



〈資料2〉拝所の位置図





字泊の川尻原にある世界遺産「中城グスク」

---

## 中城村 戦前の集落

—シリーズ1「泊」—

編集・発行 沖縄県中城村教育委員会  
〒901-2407 沖縄県中城村字安里190番地  
TEL 098-895-3707  
平成26年3月発行

---